フィールド(現場)からの風 (124)

宮島守男

文化漂うところに、人材は育つ
事に関心を持ってみませんか

9月上旬、明治以降の文化遺産で初めて世界遺産登録がされた富岡製糸場を訪ねる。旅行会社からの、比較的見学者の少ない時期との情報とは異なる見学者の多さに驚く。2回目の訪問だったが、雰囲気は大きく異なり活況を呈している。だが冬の異常な降雪のため一部の施設は損傷が大きく見学できず、また施設全体が前回の見学場所に比べ厳しく制限されていて物足りなさを感じてしまう。しかし後世に文化遺産を受け継いでいくためには必要な事なのだろう。

売店で、特定非営利活動法人「富岡製糸場を愛する会」が発行している「世界遺産・富岡製糸場と絹産業遺産群の学びパンフレット」を購入する。愛する会の高橋伸二理事長の活動が、テレビ番組で取り上げられ興味を持ったからだ。富岡製糸場が昭和62年3月で操業をやめて、翌年に14人で勉強会を立ち上げ、企業所有の施設で立ち入れられない状況下、清掃活動や地域住民に施設の価値を伝える活動を積極的に展開した中心的な人物だ。現在の会員は、1400人を上回り、これまで培った活動から、多くの解説ボランティアが在籍。訪問した日も、多くのボランティアが目を輝かせながら活動している。

これらの活動が、施設所有者の片倉工業㈱にも伝わり、平成17年に高岡市に寄贈されるまでの18年間、毎年1億円を超える維持管理費用を会社が負担、現在でも常駐のスタッフ3人が毎日メンテナンスを行うなど、施設全体が、すぐにでも操業再開できるのではと、感じさせるほどの施設の現状は驚きだ。

今回の施設見学で学んだ事が2つあった。1つは、世界遺産として申請するための考え方だ。「日本で珍しいから世界遺産」との日本中心的な評価でなく、世界からの評価として、どのようにとらえるのか。今回の登録は、「世界の絹産業を大きく変えた」が重要なポイントだった。

非常に高い生糸の品質は、世界の市場を安定させ、絹のドレスは世界の女性のファション感を一転させ、大量生産のストッキングは女性のライフスタイルを変貌させたことも事実だ。これを作文し、申請した関係者に賛辞を贈りたい。

2点目は、人を評価する制度が現場にあった事だ。フランスから来た技術者のブリュナ首長には、当時の大政大臣(現在の総理大臣)に匹敵する月給が支給され、働く工女も評価制度により一等工女、二等工女、三等工女、等外工女と月給も差をつけ、一等工女には1円75銭の月給が支給され、等外工女とは1円も異なっている。当時1円で米30～40㌔買えたと言うから、多くの家庭で満足に白米を買えなかった時代、工女の仕事に取り組む意気込みはすごかったと想像される。また一等工女は、「赤タスキ」に「高ぞうり」の着用がゆるされ、憧れ的存在にさせる職場環境づくりはさすがだ。

1日の労働時間は8時間以内、毎週の日曜日は休み、夏休み10日・冬休み10日なども与えられ、およそ1～3年くらいで技術を学び、国元に帰り指導者になった工女。労働搾取された女性労働者の暗さが無いことに心安堵する。

いつも旅の楽しみにしているのが、訪れた地の街並みとその地特有の食事と買い物だ。富岡製糸場周辺も、押し寄せる見学者を受け入れる施設の改築が多い。出会ったおばあちゃんに尋ねると、「8割以上はよそ者」と返しそうに答える。街を散策すると「かりんどう饅頭(まんじゅう)」の桃太郎旗が多い風景が気になる。

「かりんどう饅頭」は2001年に発売された、比較的新しい商品だ。主に福島県で販売されている饅頭菓子で、黒糖を練りこんだ生地で、甘さ控えめの「こしあん」を包み込んだ饅頭を油で揚げた菓子だ。ローカル的なイメージが良いのか、今では全国各地で販売され、富岡でも多くの人が買い求めていく。これからも、売れるなら、との思いで、地域とは関係ない多くの商品が誕生して行くのだろう。

どこでも出会う商品が並ぶ街並みが、地域全体の魅力を削ぎ、衰退した地域も多い。富岡製糸場を取りまく街並みが、後世にどう引き継がれるべきか地域の中で論議され、再び訪れてみたい情報を発信してほしいと願った旅でもあった。

(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)

ボランティアガイドの説明に、創業当時を思い起こす年代の多さに施設の価値が解る